

〈基調報告 ①〉

「むつ湾東岸域（野辺地地区）環濠集落

“二十平(1)遺跡”を中心として」

青森県考古学会 副会長 瀬川 滋

はじめに

六ヶ所村行政区の西側に隣接する野辺地町は、むつ湾東岸域を帯状に抱え込む地勢を呈していて、野辺地町管内では、昨今における緻密な遺跡分布調査や多発した発掘調査により、平安時代の遺跡については、豊富な情報が報告されています。それらの情報を基に当地域に分布する平安時代の情勢を簡略に述べたいと思います。

1 野辺地地区管内の平安時代集落の概要

野辺地町管内の平安時代の集落の概要把握は、平成9年度から実施された下北半島縦貫道路建設事業に伴う発掘調査による調査報告が重要な情報源となっています。

当該調査は、野辺地町の前庭部に当たる、むつ湾東岸域に面する中高位段丘面を主に調査対象地としていて、当地域は以前より、平安時代の遺跡密集地として周知されていました。

代表的な遺跡としては、環濠を有する「明前(1)遺跡(明前館)」、「蟹田(3)遺跡」や海岸域の集落跡である「有戸浜遺跡」などが挙げられます。発掘調査では、これらの周知の遺跡以外の新発見の遺跡が対象となり、改めて当地域における平安期の遺跡密集度を認識する結果となりました。

2 管内に密集する平安時代の環濠集落（囲郭集落）の様相

その発掘調査による新発見の遺跡の中で最も注目される遺跡としては、「向田(35)遺跡」が挙げられます。当調査では、狭い範囲の調査区域でありながら、竪穴住居跡が約80件検出されていて、集落は丘陵の斜面地を雛壇状に削平し、そのテラス状の平場に住居を配置する構造で、斜面段丘状住居区の背後に展開する丘陵頂部の平場には、区画溝（柵）で囲まれた住居区と、環濠で囲郭された首長層と考えられる居住空間が配置されていました。

このような集落内での階級層を明確に示した居住空間のパターンは、大規模防御性集落として注目されている、八戸市「林ノ前遺跡」に類似していると考えられます。

また「向田(35)遺跡」からは、「二十平(1)遺跡」出土の縁釉陶器のような遠隔地からの搬入品と考えられる遺物として、北宋銭やガラス玉が出土しています。また、「蟹田(11)遺跡」も新発見の環濠集落ではありますが、当環濠集落は、「明前(1)遺跡」環濠集落、「蟹田(3)遺跡」環濠集落とは同谷の侵食丘陵に配置展開しており、三連の複郭状を呈しています。

このような複郭状の景観は、集落構成員の増員（移住者）により、複合的集落構造に進展したものと考えられ、野辺地町管内における平安時代の集落構成の変遷概要は、昨今の調査活動により、かなり鮮明化してきたと考えられます。

しかし、当地域では、平安時代以前の古代期（古墳時代、奈良時代）の遺跡は全く発見されておらず、まるで無人地帯の様相です。平安時代の 10 世紀前半代になりますと、「有戸鳥井平(4)遺跡」などに見られるような住居数が、数件単位のコンパクトな集落として、希薄な分布状態で丘陵地に点在してきます。

そして、10 世紀中葉から後半代になると、爆発的に人口が増大し、「明前(1)遺跡」、「向田(35)遺跡」、「二十平(1)遺跡」などを代表とした環濠を有する集団化した大規模集落が構成され、その環濠集落は、主に中位な段丘丘陵地に配置展開してきます。

3 二十平(1)遺跡の特性について

「二十平(1)遺跡」の調査では、この大規模化して行く集落の変遷過程が、環濠の築造工程から観察されます。濠は、B-Tm 火山灰（AD946）の堆積層と先発構築された、10 世紀前半期と考えられる竪穴住居跡を断ち割って構築されていて、また、濠内の壁から検出された土留め施設と考えられる板材（ヒバ）からも、972 年とする伐採年代が示されました。

集落の年代観は、出土した製塩土器にも認められます。製塩土器は、平内町「大沢遺跡」の調査（青森県 2005 野村）において出土した製塩土器を、B-Tm 降下火山灰層を基軸層として段階的な変遷が試みられ、製塩土器の型式分類が成されているようであります。

また、その型式分類年代観と「二十平(1)遺跡」出土の製塩土器の対比では、10 世紀前半代とする製塩土器と 11 世紀代とする土器が符合いたします。

このような事例から、「二十平(1)遺跡」の集落は 10 世紀初頭期に先発構成され、10 世紀中葉以降に環濠が築かれ、防御性環濠集落の様相に変化し、大規模集落を構成したと考えられます。

集落は百数十年の間営まれ、11 世紀中後半に終焉を迎えます。環濠に囲郭された住居空間は、住居の建て替えや盛土、削平整地が幾度も繰り返され、激しい重複状況を呈していました。

これらの状況から、環濠内の土地利用には厳格な規制が加えられていることが窺われ、また、このような集落における秩序の保全是、首長層を中心とした階級制度が確立していたものと考えられます。遠隔地との交易交流を示した縁釉陶器や、複数発見された祭祀宗教に関連する錫杖状鉄製品などからは、相当な勢力を固持した集団とも想定され、大集落の生活を支える食糧としては、多量に検出された炭化米が挙げられます。

また環濠集落沿辺の湿地帯の調査では、10 世紀後半代に構築された水路状遺構や土壌分析はできませんでしたが、水成堆積層中には水田耕作層に擬似する堆積層が観察されていて、水田耕作の可能性が示唆されています。

そして遺跡の目前に展開するむつ湾からは、豊富な魚介類、側縁を流れる野辺地川からはサケ、マスなどの大型遡上魚の捕獲が考えられ、食糧源となるむつ湾との関係は、塩の生産においても密接であると考えられます。製塩土器の出土量は、近接する他の遺跡と比べて圧倒する量でありますので、塩の生産は当集落の主要な産業として、長年に渡って継続操業されたものと考えられます。

昭和57年(1982)の青森県教育委員会による『青森県の中世域館』の調査報告においては、「二十平(1)遺跡」は、5連の郭で構成されている大規模な館跡とされていますが、発掘調査区からは、約1、2km離れた継続丘陵地の露頭部からも、平安時代の住居跡が数軒発見されていることが分かりました(「獅子沢(5)遺跡」)。

これらの平安時代の遺跡分布状況から、二本木川と御手洗瀬川に挟まれる低位段丘上の平場には、総延長約1.5km前後の規模に渡って集落が展開するものと想定され、野辺地管内に点在する環濠集落跡とは別格な性格、規模を保有するものと考えられます。

野辺地町管内に密集する平安時代の環濠集落の様相からは、この地域を共有の拠点とする意思疎通の働いた集団の大移動によって構成されたのは間違いない情勢であると考えられます

- | | | |
|---------------|----------------|---------------|
| 1 向田(7)遺跡 | 23 中新田(2)遺跡 | 34 大撫沢遺跡(東北町) |
| 2 向田(6)遺跡 | 24 野辺地蟹田(11)遺跡 | 35 浜掛(1)遺跡 |
| 3 向田(5)遺跡 | 25 明前(1)遺跡 | 36 八幡町遺跡 |
| 4 向田(10)遺跡 | 26 古明前(1)遺跡 | 37 家ノ上(1)遺跡 |
| 5 向田(14)遺跡 | 27 明戸鳥井平(1)遺跡 | 38 槻ノ木(4)遺跡 |
| 6 向田(1)遺跡 | 28 明戸鳥井平(4)遺跡 | 39 二十平(2)遺跡 |
| 7 向田(17)遺跡 | 29 明戸鳥井平(2)遺跡 | 40 獅子沢遺跡 |
| 8 向田(13)遺跡 | 30 木明(2)遺跡 | 41 陳場川原(3)遺跡 |
| 9 向田(37)遺跡 | 30 千草橋(5)遺跡 | 42 大平下(1)遺跡 |
| 10 有戸浜遺跡 | 32 坊ノ塚(2)遺跡 | 43 田端(2)遺跡 |
| 11 向田(21)遺跡 | 33 坊ノ塚(1)遺跡 | 44 上小中野(1)遺跡 |
| 12 向田(27)遺跡 | | |
| 13 向田(22)遺跡 | | |
| 14 向田(24)遺跡 | | |
| 15 向田(23)遺跡 | | |
| 16 向田(34)遺跡 | | |
| 17 向田(35)遺跡 | | |
| 18 小沢平(1)遺跡 | | |
| 19 野辺地蟹田(4)遺跡 | | |
| 20 野辺地蟹田(3)遺跡 | | |
| 21 野辺地蟹田(6)遺跡 | | |
| 22 野辺地蟹田(7)遺跡 | | |

